

令和 3 年 11 月 14 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 令和元年度 (平成 31 年度)

受付番号 201960043

氏名 飯野 りさ

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地 (派遣先国名) 用務地: ウプサラ大学 (国名: スウェーデン)
2. 研究課題名 (和文) ※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。
シリア正教徒のディアスポラにおける世俗歌謡文化の形成: 共同体と歌の関係に着目して
3. 派遣期間: 平成 31 年 4 月 16 日 ~ 令和 3 年 10 月 15 日
(914 日間)
4. 受入機関名及び部局名
受入機関名: ウプサラ大学
部局名: 言語学・文献学部
5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)**
【記載事項】
 - ・ 研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等
 - ・ 新型コロナウイルス感染症の影響にかかる特例措置のうち、国内採用開始・採用期間延長・翌年度渡航のいずれかの適用を受けた場合は、当該措置の適用による影響等(注)「6. 研究発表」以降については様式 10-別紙 1~4 に記入の上、併せて提出すること。

本報告書は課題名『シリア正教徒のディアスポラにおける世俗歌謡文化の形成：共同体と歌の関係に着目して』に関して2019年4月中旬から2021年10月中旬に行われた調査研究に関して報告するものである。以下では、はじめに本研究の目的を概説するが、それとともに2020年初頭からの新型コロナウイルス感染拡大の研究への影響についても概略する。次に、シリア正教徒の音楽研究に関して、まずは典礼聖歌研究、次に本研究の主要テーマである世俗歌謡研究について述べる。本研究の課題はあくまで世俗歌謡研究であるが、以下で説明するようにシリア正教徒の音楽文化の中核には典礼聖歌の伝統および教会が中心となって形成されてきた彼ら独自の世界があり、非常に重要な役割を果たしており重要なテーマでもあり続けている。

本研究は、これまで中東の東方キリスト教諸教会の一宗派として知られてきたシリア正教会の信徒たちの共同体内に存在する世俗歌謡文化に関して研究・考察することを主要な目的としている。彼らはもともと中東、特に20世紀半ばの時点ではトルコ、シリア、レバノンなどに多くが居住していたが、今日、欧米への移住によるディアスポラが進み、調査研究は彼らの移住先の一つであるスウェーデンで実施された。中東、特にシリアから欧州への移住・移民の流れはシリア内戦の勃発（2011年）によりこの10年でよく知られるようになったが、シリア正教徒の場合、この集団の故郷とみなされているトルコ南東部に位置するトゥール・アブディーン地方から他所への移住・移民はすでに100年前には始まっていた。オスマン帝国の支配下で同地方やその周辺に居住してきた彼らは、歴史的にはアルメニア人の虐殺として知られ、彼らの言葉では「セイフォー」として知られる第一次世界大戦中の虐殺や強制移住で同地を追われ、一部はトゥール・アブディーン地方に居住し続けたものの、多くはシリアやレバノン、またイラクなどへと移住した。1960年代末からは中東域外のスウェーデンやドイツそしてオランダ、今日ではさらに北米や豪州などへと移住している。本研究は其中でも今日推計でおよそ10万人が暮らすスウェーデンにおいてフィールドワークを行った。世界的規模での彼らの総人口は現在推計50万人ほどで、スウェーデンのシリア正教徒共同体は其中でも最も大きなディアスポラ集団であるといえる。

ところで、「シリア正教徒の世俗歌謡文化」に関する研究という課題の字面に戸惑いを覚える人もいるかと思う。シリア正教会やシリア正教徒といえば、学術的にはキリスト教の宗教・宗派研究や同教会の典礼語である古典シリア語の文献学が知られており、これまでは彼らはキリスト教諸教会の一教会、ないしは一宗派として認識されてきた。音楽研究においても教会の聖歌が研究対象として知られてきた一方で、世俗歌謡に関しては研究者の間にその存在が知られるようになったのは1990年代半ばのことであった。そこで次のような問いが重要になる。世俗歌謡の伝統も保持しているならば、彼らは宗派以上の存在、すなわち集団の中に宗教音楽も世俗音楽も包摂している一種の民族ではないかである。本研究は、この共同体の音楽研究でこれまで扱われてこなかったこのような部分を補うことが第一の目的であるが、その先には民族音楽学分野では必ずしも民族集団として扱われず宗派集団として認識されてきたシリア正教徒たちに関して、単なる宗派集団としてではなく宗教を核としながらも民族的性質を持つ集団であるという性質に強い関心を抱いているのである。先行研究としては、シリア内戦以前にシリアの都市アレppoで聖歌とその集団をめぐる文化人類学的研究を行っているジャルジュールの研究がある。宗教研究や文献学では宗派として扱われてきたものの、同氏の研究では彼らは民族宗教的集団と表現されており、こうした認識がすでに同時代的な事象を扱う研究者の間では当然とみなされていることがわかる[Jarjour 2018]。また、中東においては、民族性だけでなく宗教も社会的な集団形成に大きな影響力を持つ点がかつてから知られてきた。本研究はこうした要素を考慮に入れ、彼らのディアスポラの地の中でも人口の多いスウェーデンで調査地を開始した。

海外特別研究員としての研究期間は2019年4月中旬から二年間の予定であったが、その間に本研究に着手するとともに、科研費基盤研究(B)「中東少数民族の音文化に関する研究：共有と非共有に着目して」(課題番号18H00626)の研究代表者として同科研に関わる研究にも携わった。その間に、周知のとおり、新型コロナウイルス感染症の感染が世界的に広まり、感染拡大による影響で調査研究活動が滞り、滞在期間を半年延長することとなった。

調査初年度の秋には、本来は予定していなかったものの上記科研のプロジェクトとしてシリア正教徒の音楽家を日本に招聘し、レクチャー・コンサートを実施することとなった。そのため、一年目は当初の予定よりも同プロジェクトへの関わりが多くなり、プロジェクトのために多くの時間を割くことになったが、その一方で、同プロジェクトはのちに触れるように世俗歌謡文化の多様性への理解を深めるきっかけとなった。こうした点を加味して、一年目に必ずしも十分でなかった聞き取り調査等を二年目に予定していたが、2020年初頭から今日も影響している新型コロナウイルスの感染拡大によるパンデミックのために対面調査が難しくなり、次第に宗教・文化行事の開催も難しくなったことから、こうした行事の参与観察なども不可能になった。状況は以下の通りであった。2020年初頭に中国での新型コロナウイルスの感染拡大が報じられるようになると、2月初めにはスウェーデンでも感染者が確認され、いわゆる対人距離を取る等の感染防止対策が求められるようになった。次にヨーロッパ諸国でのコロナ感染が急速に広がり、2020年3月中旬に諸国が一斉に国境を閉じるとこうした状況はさらに進み、高校・大学レベルは完全にリモート化・オンライン化し、同状況の解除は翌年の2021年の秋の新学期を待つこととなった。ミサや結婚披露宴等を含む人の集まりに関しても、参加人数制限等の規制が導入されて、ミサ等において会衆参加がほぼ不可能となり、通常は交流の場となっていたミサ後の懇親の場な

どが開かれないなど社会文化的活動も停滞した。こうした状況から、2021年3月の段階ではまだ対面調査が難しかったが夏には状況が若干和らぐ可能性を考慮して、もともと二年の予定であった派遣期間の延長を申請し、半年間の派遣期間延長がかなった次第である。新型コロナウイルスの感染拡大による社会文化活動の停滞は、シリア正教徒たちの強み、すなわちスウェーデンの特定の地域に集住し、人々の交流により密な関係性を築いてきたという彼ら共同体の特徴を著しく削いだことは明らかであった。しかし、その一方で従来からのインターネットを介したやり取りが強化され、現実世界を補っていたようにも見えた。こうした点が最初に顕著に感じられたのが、典礼聖歌研究に関わる事象であった。いわゆるロックダウン政策をスウェーデンは取らなかった一方で、同政策により都市封鎖が敷かれた国々では日曜ミサやさらには日々の聖務日課がすばやくオンライン化・リモート化したのである。

日々歌われる聖歌に関しては共同体内で使用されてきたいくつかの資料があり、典礼言語である古典シリア語で書かれている。日々の祈りである聖務日課に関しては式次第にあたる『シュヒーモー』があるが、今日ではスウェーデン語で翻訳がある。ミサに関しては『ファンキーソー』があるが、これは教会の聖域に収められており基本的に門外不出で、その代わりとして日曜ミサ等の式次第は各教会から簡易な形で出回っていることが多い。近年は、さらに典礼周期に合わせて聖歌を紹介する歌詞付き譜面集も出版されている¹。そして聖歌研究で最も言及される聖歌集『ベース・ガゾー』があるが、従来から歌詞集に当たる印刷物が出回るとともに録音も何らかの形で入手できる程度にはなっていた。こうした資料に加えて、コロナ禍の発生によりこうした録音資料がオンライン上に増加した。以前からあったものとパンデミックで出回るようになったものを合わせると大量のビデオ資料がネット上に存在するようになったのである。また、インターネットだけでなく、今日人々の生活に欠かせなくなったIT関連ツールにスマートフォンがあるが、典礼暦やその日の重要な行事などをチェックできるアプリから『ベース・ガゾー』の歌詞と旋律（歌唱）が1970年代の録音から近年のものまでデータベース的に網羅されているものまで出現している²。

こうした資料やこれまでのフィールドワークから次のようなことが明らかになってきた。典礼聖歌に関しては、一週間を一単位として八週間を一周期とするいわゆるオクトエコスを採用していることから、この八つの分類はマカーム分類なのであるという説明が一部の関係者の間で流布してきた。しかし、こうして全体像を大量の資料から分析・考察すると、第一にかねてからの言われていたこの「オクトエコス（八旋律群）分類＝マカーム」説は、その妥当性が必ずしも明瞭でないように思われる。しかし、その一方で典礼暦の一単位として使用されている一から八までの序数詞に何らかの記号性、すなわちそれぞれにある種の音や雰囲気等のイメージを抱いている司祭もおり、最終的な結論はまだ先になるだろう。そもそも、このオクトエコスに関しては、音楽関係者が音楽的要素を重視しつつ語る場合と、単純に典礼暦として語る場合では重視する要素がずれているように見受けられる。また、典礼聖歌研究で陥りがちな問題は、その時間軸の長さ（通時的問題）と地理的広がり（共時的問題）で、議論の的を絞る際の弊害となっている。この点は、2021年3月にオンラインで開催されたシンポジウム³でも、一部の参加者から指摘されている。このような音楽学上の問題がある一方で、聖歌やミサに関しては文化的な見地からシリア正教会独特と思われる内容も見受けられた。その一つに歌詞内容がある。こうした文化的な要素に関しては、2020年8月の東方キリスト教会大会で発表⁴を行った。先にある音楽学的議論に関しては、同年11月の日本音楽学会大会での発表⁵として公けにしているが、上述のように先行する議論が時間的にも地理的にも入り組んでおり、さらなる検討が必要である。

コロナ禍以前の2019年には、前述の科研費による活動で夏に中東（イランとトルコ）で渡航調査を行い、秋には一時帰国しレクチャー・コンサートを実施した。同科研はトルコ、シリア、イラク、イランの少数派集団の音楽に関する共同研究で、報告者は同科研でもシリア正教徒に関しても研究するとともに、同地域のクルド人の音楽に関して渡航調査などで知見を深めた。トルコ南東部、シリア北東部、イラク北東部、そしてイラン北西部は一般には今日、クルディスタンとして知られている地域である。しかし、そこにはクルド人以外にシリア正教徒などのキリスト教徒やヤズディー教徒など、様々な少数派が居住している。それゆえに、音楽面、特に世俗音楽分野においては音楽的に共有する特徴を有していたり、また、集団横断的に音楽に携わる人々は交流していたりすることも多かった。そうした特徴を行政の側から積極的に発信しているのが、シリア正教徒が今日、民族的故郷としているトゥール・アブディーン地方を含むトルコのマルディン県である。同県は、その文化政策の一つとして2018年夏に同県第二の都市ミディヤットで多言語・多宗教音楽祭を開催し、報告者は2018年夏の同フェスティバルを見学することができ、同フェスティバルで多言語合唱団を指導していた人物に翌年2019年にはお話を伺う機会を得た。一連の調査の結果や分析は、2019年7月の科研費による中東音文化研究会第2回

¹ Gabriel Aydin, 2018, *Syriac hymnal: according to the rite of the Syriac Orthodox Church of Antioch*, Syriac Music Institute.

² スマートフォンアプリ : *Beth Gazo Portal*, published by the Syriac Orthodox Archdiocese for the Eastern United States & Beth Mardutho: the Syriac Institute. 最終更新日付は2018年3月（初出年は不明）。

³ *The Syriac Musical Tradition: Eastern Heritage*, March 2021, ホームページは www.syriacmusic2021.org。スイスのジュネーヴ高等音楽院が中心になって開催され、一部対面だがそれ以外はオンライン開催。

⁴ 飯野りさ、2020年8月26日、研究発表『シリア正教会の聖歌に関する覚書：テキストと旋律にみる諸特徴』、東方キリスト教会第20回大会、オンライン開催。

⁵ 飯野りさ、2020年11月15日、研究発表『シリア正教会の聖歌における八旋律群の諸特徴：音文化的視点から考える』、日本音楽学会第71回全国大会、オンライン開催（武蔵野音楽大学）。

研究会で報告している⁶。そこで明らかになったことは、この土地に居住する人々の音楽の類似点や相違点であり、かつ後述するレクチャー・コンサートでも明らかになるように、マルディンはクルド語やトルコ語の歌謡だけでなく、アラビア語歌謡も盛んな土地柄であったことである。そして、シリア正教徒の場合もマルディン出身者は少なからずおり、以下に説明するようにアラビア語歌謡も彼らの世俗歌謡文化の一部であったことだった。

2019 年度に行ったレクチャー・コンサートは、スウェーデンに居住するシリア正教徒の音楽家たちを招へいして同年 10 月末から 11 月初めに実施した⁷。コンサートは二部に分かれ、報告者による簡単なレクチャーを冒頭に配し続いて聖歌数曲からなる前半、後半が世俗歌謡数曲という構成であった。報告者はプログラムの作成に関わり、日本人聴衆向けに歌詞の日本語訳の作成を行った。聖歌は古典シリア語、世俗歌謡は口語シリア語（トゥーローヨー語）で歌われるのが一般的であるが、プログラムには古典アラビア語の聖歌が一曲と、口語アラビア語マルディン方言の歌も歌われた。報告者は古典シリア語とおよび口語シリア語を学習しているが、翻訳に関しては多くの方々の協力を得た。今日、スウェーデンやドイツで人気のあるシリア正教徒の歌手たちは言語的にはトゥーローヨー語で歌っており、スポティファイなどでも聴くことができる。しかし、マルディン方言のアラビア語歌謡に関してはその存在をほとんど認知していなかった。また、マルディン方言のアラビア語は北メソポタミア方言に属し、報告者の知るシリアやレバノンの方言とも異なるため、戸惑いを覚えたのも事実である。

シリア正教徒共同体においてマルディン方言のアラビア語歌謡を世俗歌謡文化の一部とした中核的存在は、シリア北東部のトルコとの国境に位置する町カーミシュリー出身のジャーン・カラート（生没年 1949–2003）である。トゥール・アブディーンを故郷とするシリア正教徒たちはその多くが村の出身であるが、なかにはマルディンなどの都市出身もあり、カラートはそうした人々の流れを汲んでいる。彼らの村ではトゥーローヨー語や時にはクルド語が話されていたなかで、歴史的に交易で栄えた都市部ではアラビア語が重要な役割を果たしてきたのである。こうした地理的条件からマルディン方言は、トルコ語が語彙に多く入り、動詞の変化もシリアやレバノンの口語アラビア語とは若干異なり独特のものがある。カラートのアラビア語の歌には、アラビア語であるもののキリスト教徒的な文脈が垣間見られる内容のものもある。旋律に関して言及すると、この地域では上述のように多くの民族・集団が民謡文化を共有し、その際には言語の異なる替え歌も多く歌われてきたことから、こうしたマルディン方言歌謡も替え歌であることが多い。その代表例は、マルディンの博物館総局がフェイスブック等で紹介している多言語の民謡『サビーハ』⁸で、トルコ語、クルド語、アラビア語マルディン方言、トゥーローヨー語、アルメニア語などで歌われている。こうした民謡などの数々は、以前は他の言語で歌われてきたが、そうした歌はアラビア語マルディン方言やトゥーローヨー語の歌詞を得て、共同体内の結婚披露宴やタバの会、様々な文化活動の機会でも歌われ、シリア正教徒の共同体の中で共有されることにより彼らの文化の一部となっていく様子が見て取れる。

しかし、世俗歌謡に関して言えば、以前はトゥーローヨー語による歌がなかったなかで、1960 年代末に同言語による歌を歌い始めた歌手ハビーブ・ムーサー（1952 年生）の人気や影響は今日、歴史となっている。「1968 年にハビーブ・ムーサーがトゥーローヨー語で『シャーモー、マル』（「話しておくれよ、シャーモー」の意）を歌ったのが世俗歌謡の始まり」という言説は、衛星テレビやネット等の媒体、そして日々の会話の中で語られ、2019 年 5 月にはその 50 周年を記念するコンサートがオランダで開催されている⁹。その一方ですべてのシリア正教徒がそうした「歴史」を知っているのではないが、それでも 1970 年代前半の記憶がある世代にとっては、ハビーブ・ムーサーの上記の歌が流行していたことはしっかりと記憶に留められている。こうした文化運動は、上述のカーミシュリーだけでなく内戦前のレバノンの首都ベイルートでも盛んであった。当時レバノンではバールベック芸術祭に代表されるような文化活動が盛んであり、シリア正教徒共同体もその文化的活力の一端を担い享受していたといえよう。

ここまででは世俗歌謡形成の流れを簡単に追ってきたが、報告書を締めくくるにあたり以下の点に触れておきたい。いわゆる歌手や音楽家の列伝的記述や歌の歴史以外に注目すべき点は、こうした文化をはぐくんできた文化的背景である。世俗歌謡というと、教会の外で教会とは関係なく行われると想像されがちであるが、その背景には教会の庇護・後援が意識的にも無意識的にもあることは触れておかなければ

⁶ 飯野りさ、2019 年 7 月 6 日、研究報告「中東音文化における共有と非共有—この一年の調査から得た知見を中心に—」、中東音文化研究会第 2 回研究会、聖心女子大学。

⁷ レクチャー・コンサート詳細：第一回目、フェラース・シャレスターン（カーヌーン）、マリアム・アルシャーマニー（歌）、ミーラード・バーヒー（ウード）、ジョルジュ・オーロー（打楽器）、飯野りさ（解説）、2019 年 10 月 31 日、レクチャー・コンサート『シリア正教徒の音楽：古い伝統、新しい伝統』、関西学院大学内関西学院会館ベーツチャペル、主催：科学研究費基盤（B）課題番号 18H00626「中東少数派の音文化に関する研究：共有と非共有に着目して」（研究代表者：飯野りさ）、後援：関西学院宗教活動委員会。第二回目、出演者は前掲に同じ、2019 年 11 月 3 日、レクチャー・コンサート『シリア正教徒の音楽：古い伝統、新しい伝統』、主催：前掲に同じ、共催：東京大学中東地域研究センター。

⁸ YouTube でも公開されている。“MARDİN'İN SESLERİ / SOUNDS OF MARDİN”、

https://www.youtube.com/watch?v=S6sybft_vCM。Mardin Müze Müdürlüğü（マルディン博物館総局）のチャンネル。

⁹ “50 Years Suryoyo Music Concert”として、オランダのエンスヘーデ市の音楽ホールで 2019 年 5 月 3 日に開催された。

ればならない。前述のシリア正教徒歌謡 50 周年記念コンサートは明らかに「世俗歌謡の創始 50 年」を祝っていたが、貴賓席には開催地であるオランダ教区の総主教にあたる聖職者も列席していた。他の行事も同様で、教会の主催でなくとも聖職者は貴賓席に列席することが一般的である。こうした習慣はある意味で手続き上の問題であるといえなくもない。

しかし、過去を振り返って俯瞰すると、聖職者は手続き上、ないしは形式上の役割だけでなく、歌謡文化の内容に関しても重要な役割を演じてきたといえるのではないか。世俗歌謡文化を推進してきた伝統の一つに、アラビア語だとサフラ、シリア語だとシャフローというタベの会の慣習がある。シリアの古都アレppoのサフラはムワッシャフという古典歌謡を中心とした歌謡文化をはぐくんだムスリムの伝統として名高いが、その一方で人々が集まって集うことが第一の目的で、歌や音楽のないサフラも多い。シリア正教徒の場合も、人々が集まってタベを過ごす習慣はそれなりにみられたようで、やはり、そうした集まりでは聖歌を多く記憶している聖職者がいくつかを披露したり、報告者が体験したものでシリア正教会への想いを歌う歌を聖職者が中心となりともに歌ったり、トゥール・アブディーンやメソポタミアを懐かしむ歌が皆で歌われ、さらに今日ではポップス調の応援歌なども聖職者の音頭で歌われたりもしていた。カーミシュリーでは、教会付属の青少年の活動に上述のジャン・カラートらが指導者として参加していたが、彼の指導を受けた若者の中にはその後、音楽家になったものもいる。また、その逆もあり、音楽家や歌手として活躍し後進の指導もしていたが、のちに聖職者になるような例も必ずしも稀ではない。

また、オランダで世俗歌謡開始 50 周年を祝うまでには、トゥール・アブディーンやカーミシュリーなどでの音楽体験を持つ人々がスウェーデンやドイツなどへと幾重もの波となって移住していった歴史がある。1960 年代末から 70 年代にかけてカーミシュリーやバイルートで世俗歌謡の創作普及を担った世代、次にレバノンやトルコからスウェーデンやドイツに渡りそれを継続し、ポップスなどにもジャンルを広げていった世代、さらにはシリアからも 2010 年代には多くが欧米に渡り、各人がたどり着いた先の共同体に中東で培った音楽を注入し続けてきたことも大きいだろう。先に、聖歌研究の通時的・共時的な広がり難しさを指摘したが、世俗歌謡文化に関しても半世紀という短い期間であるにもかかわらず、時間や空間が織り交ざった大きなうねりが見出せる。それは一種混とんとした状態に見えるが、人の流れに代表されるような時代の流れと民謡から歌謡曲・ポップスといったジャンルをトゥーローヨ一歌謡としたり、時にはアラブ歌謡さえも彼らの文脈に引き入れて発展させたりして、一連の織物が紡がれてきたのである。こうした幅広い調査・研究の結果をまとめることは非常に骨の折れる仕事ではあるが、より精査してできる限り早く学会発表や論文の形で公表したいと考えている。

以上